

山本文緒さん。

このたびは中央公論文芸賞、まことにおめでとうございます。

そしてこの言葉が、あなたへの惜別の言葉になるうとは、全く予想していないことでした。『自転しながら公転する』を読んだ時、私たち選考委員のすべてが、「山本文緒復活」を信じていました。あなたが長く続いた書けない時期を抜け出し、その才能を存分に発揮する時が来たと思っていたのです。それほどこの作品は素晴らしいものでした。

最初に読んだ時、私は「やられた!」と思いました。「やられた」というのは、作家が作家に贈る最高の賛辞だと思っています。

地方都市に住む、ごく普通の女性を描く。事件も不倫もなく、ひとつの小説として完成させる、というのは私がかねてから考えていたことでした。しかし私はどのようにストーリー展開させていったのか、うまく組み立てることが出来ず、ずっとモチーフを温めるばかりでした。

それを山本さんはらくらくとやってのけたのです。大きな不幸が起こるわけではない。主人公は一人の男性と知り合って恋をする。彼女が悩み考えることはただひとつ、「本当にこの男性と結婚していいのだろうか」ということだけです。

山本さんは、ただそのテーマだけで長編を書き、最後まで読者を飽きさせないどころか、ずっと緊張の空間に置くことが出来ました。絶妙な会話、細やかな心理描写、そして最後に静かな感動。これは並の才能で出来ることではありません。

そしてまるでトリックのような、冒頭とラストのシーン。これについては選考会でさまざまな議論があり、

「いけない方がよかったですのではないか」

という意見が大半でした。実は私もそう思っていました。

しかし今では私はその意図がはっきりとわかります。平凡な男と女が出会って結ばれる。そのことは必ず未来に繋がっていくものだということ。結ばれてそれで終わり、というわけではない。やがて子どもが生まれ、彼、彼女らも恋愛して誰かと結婚していく。人の営みというのは「自転しながら公転する」。山本さんはもしかすると書けなかった時期にそのことを思いついたのかもしれないと、私は想像するのです。

まだ若く未来ある作家の死というのは本当に悲しいし、つらいことです。が、作家は別の生命を与えられています。作品によって長くこの世に生き続けることが出来るのです。

『自転しながら公転する』は、そうした一冊になるに違いありません。

山本さん、本当におめでとうございます。そしてさようなら。